

## Profile



宮田まゆみ(笙) *Mayumi Miyata, shō*

国立音楽大学ピアノ科卒業後、雅楽を学ぶ。東洋の伝統楽器「笙」を国際的に広めた第一人者。古典雅楽はもとより、武満徹、ジョン・ケージ、細川俊夫など現代作品の初演も多く、小澤征爾指揮サイトウ・キネン・オーケストラ、シャルル・デュトワ指揮N響、アンドレ・プレヴィン指揮ニューヨーク・フィル、ウラディーミル・アシュケナージ指揮チェコ・フィル、大野和士指揮ベルギー王立歌劇場管、ジョナサン・ノット指揮バンベルク響、BBC響、WDRケルン放送響ほか国内外のトップオーケストラと共演。ザルツブルク、ウィーン・モデルン、ルツェルン、シュレスヴィヒ・ホルシュタイン、パリの秋、アヴィニオン、ダルムシュタット、ドナウエッシンゲン、タンゲルウッドなどの音楽祭での公演、ウィーン、パリ、アムステルダム、ミラノ、ニューヨークなどでのリサイタル等、幅広く活躍している。



鈴木生子(クラリネット) *Ikuko Suzuki, clarinet*

東京藝術大学卒業。その後、マンハッタン音楽院及びアムステルダム音楽院(バス・クラリネット専攻)にて修士号を取得。2008年アンサンブル・コンテンポラリーαのメンバーによるリサイタルで、15世紀の作曲家オケゲムから現代日本の作曲家まで幅広いプログラムを演奏。2010年よりリサイタル「ikukoシリーズ」を開催。また「カラダをうまく使うことでもっと自由に吹ける?」との問題意識から、カラダの動きを自身で探る面白さとその変化を実感するフェルデンクライスメソッドを実践中(2003年オランダで指導免許を取得)。アンサンブル・コンテンポラリーα、オブロークラリネットアンサンブル、NYリコリッシュアンサンブルのメンバー。東京都立総合芸術高等学校講師。



松本卓以(チェロ) *Takui Matsumoto, violoncello*

1973年東京生まれ。東京藝術大学卒業、同大学院修了。在学中に福島賞受賞。藝大定期においてサン＝サーンスのチェロ協奏曲を協演。ソロ、室内楽、オーケストラ奏者として幅広いレパートリーに取り組む一方、特に現代音楽の分野では作曲家との共同作業に力を入れており、これまでに行った初演は150曲を超えている。またバンドネオン奏者小松亮太氏とのタンゴ演奏も意欲的に行っており、これまでに10枚以上のアルバムに参加。ガウデアムス国際現代音楽祭(オランダ)他、国内外の音楽祭に多数出演。アンサンブル・コンテンポラリーα、アンサンブル東風、JSCMユース室内オーケストラ、GEN室内管弦楽団、小松亮太&オルケスタティピカ、エレメンツカルテットのメンバー。アンサンブル・ノマドレギュラーゲスト。東京藝術大学管弦楽研究部講師。



多久潤一郎(フルート) *Jun-ichiro Taku, flute*

東京藝術大学在学時より現代音楽アンサンブル「BOIS」のメンバーとして国内外の作曲家の新作初演を手がけ、その後も『アンサンブル・コンテンポラリーα』のメンバーとして同時代の音楽を中心に活動。ソリストとしても新日本フィルをはじめ数々のオーケストラと協奏曲を共演している。また民族音楽にも強い興味を示し、中国、アイルランド、ハンガリー、トルコなど世界各地の伝統音楽、民族楽器の奏法をフルートで再現する『EAST×WEST』というリサイタル・シリーズを行っている。自身がリーダーを務める次世代型フルート・アンサンブル『マグナムトリオ』は国内ツアーはもとより、イギリス、カナダ、アメリカ、韓国など様々な国で公演を行っている。フルートを木ノ脇道元、佐久間由美子、竹澤栄祐に師事。



甲斐史子(ヴァイオリン) *Fumiko Kai, violin*

桐朋学園大学卒業、同大学研究科修了。第3回江藤俊哉ヴァイオリン・コンクール第1位、第5回現代音楽演奏コンクール(競奏V)第1位、第12回朝日現代音楽賞受賞、2003年度青山パロックザール賞受賞、ドイツ・ダルムシュタットにてクライニヒシュタイナー賞受賞、アンサンブル・ノマドのメンバーとして第2回佐治敬三賞受賞。神奈川フィル、日本フィル等と共演。オランダ「ガウデアムス」、フランス「フェスティヴァル・アテンボ」、イギリス「ハダース・フィールド」等の国際現代音楽祭に出演。2008年、一柳慧率いるアンサンブル・オリジン of theメンバーとしてカーネギー・ホールで公演。北京中央音楽学院、国家大劇場、上海音楽学院など中国でも日中現代作品を中心にリサイタル、レクチャーを重ねている。東京藝術大学非常勤講師。



大須賀かおり(ピアノ) *Kaori Ohsuga, piano*

桐朋学園大学音楽学部演奏学科卒、同大学アンサンブルディプロマコース修了。第9回日本室内楽コンクール第2位。2001年、デュオ「ROSCO」を結成、第5回現代音楽演奏コンクール(競奏V)第1位、第12回朝日現代音楽賞受賞、2003年度青山パロックザール賞受賞。2010年、現代音楽アンサンブル「mmm...」を結成、東日本大震災義援音楽配信プロジェクト・ヒバリを通して世界から100人の現代音楽作品を録音、配信。2012年、「KOHAKU」を結成、知られざる歌や子供のための歌を紹介。同年、「リレーション'70」を結成、室内楽'70の全委嘱作品を再演。国内外の音楽祭等に出演、初演作品は200曲を超える。ジパングレーベルより2枚のCD、楽譜集をリリース。日仏現代音楽協会会員。桐朋学園芸術短期大学、東京成徳大学非常勤講師。

# 永劫と一瞬

齊木由美室内楽作品展

オリヴィエ・メシアン *Olivier Messiaen (1908-1992)*

鳥の小スケッチ *PETITES ESQUISSES D'OISEAUX (1986)* (pf)

\*

齊木由美 *Yumi Saiki (1964-)*

アントモフオニーVII *Entomophonie VII (2014/W.P.)* (sho)

トリ・コラーージュ *TRI-COLLAGE (2014)* (vc)

エピソードI *Epiode I (2009)* (m+pf)

嘆きは踊りに変わる *Turn My Mourning into Dancing (2013)* (fl+cl+vc)

歓 *JOY (2014/岐阜現代美術財団委嘱新作-W.P.)* (pf)

キリエ-b *KYRIE-b (2008/2013/W.P.)* (sho+b.fl)

アントモフオニーII *Entomophonie II (2003)* (fl+b.cl+vn+vc+pf)

2014年5月17日(土) 17:30開演 (17:00開場)

宮田まゆみ(笙) *Mayumi Miyata, shō* 多久潤一郎(フルート) *Jun-ichiro Taku, flute* 鈴木生子(クラリネット) *Ikuko Suzuki, clarinet*  
甲斐史子(ヴァイオリン) *Fumiko Kai, violin* 松本卓以(チェロ) *Takui Matsumoto, violoncello* 大須賀かおり(ピアノ) *Kaori Ohsuga, piano*

岐阜現代美術館/NBKコンサートホール 錦屋バイテック会社工団内 岐阜県関市桃紅大地 番地 phone:0575-23-1121

©Kazuo Hiroji

Ci-Co-Ma

岐阜現代美術館  
Gifu Collection of Modern Arts

# 永劫と一瞬

斉木由美室内楽作品展



©Kazuo Hiroji

## 斉木由美

Yumi Saiki

<永劫と一瞬>ということばは、2012年に制作された篠田桃紅氏の作品\*のタイトルであると同時に、私が創作において常々考えているテーマでもあります。音楽の時間の中に「永遠」を見たい、「永遠」という神々しい時の中に「一瞬」という生の響きを厳粛に聴き取りたい、という私の根底にある想いは、その創作姿勢において年々強くなっているように思います。一瞬の輝きと、非時間的時間＝永遠という不変への憧れは、時に、虫の響きや鳥の歌を通して音楽に表われてくるものなのかもしれません。

フランスを代表する作曲家オリヴィエ・メシアンは、自らの音楽の素材源にしていた「鳥のさえずり」を、独自の音楽言語によって模倣し、それらを多くの作品の中に取り入れました。メシアンは、文明に汚されていない、いわば恩寵のままとしての「鳥の歌」を、永遠なる世界へつなぐひとつの表象として音楽の中に用いていたのかもしれませんが。

そのメシアンの音楽に共感するひととして、私は鳥ならぬ「虫の音楽」を2001年頃から書き始めました。自然界に存在する音の中でもひとときユニークな虫の鳴き声は、鳥のような抑揚に富む華やかな装飾はありません。

しかし、特に秋の虫の響きの、止まったような時間感覚は独特で、そのひんやりと漂う空気や、様々な響きの断片が遠くに近くに浮かび上がる幻想的で美しい音の様相は、この地上にある音楽の原型とさえ感じられるほどです。そうした虫の響きに接するたびに、私の想いは永遠へと引き上げられるのです。本日の演奏会では、メシアンの「鳥の音楽」とともに、私の「虫の音楽」、そして様々な「時の声」を通して、<永劫と一瞬>という時の形に想いを馳せることができればこの上なく幸せです。本日も来場いただきました皆様への感謝とともに、篠田桃紅氏の素晴らしい作品に囲まれながらの作曲作品展の場を与えてくださいました岐阜現代美術財団に心から感謝申し上げます。

\*「桃紅を聴く Resonance: 共鳴」展 図録 p.11参照



## Profile

愛知県立芸術大学音楽学部作曲科卒業。1991年渡仏。翌年パリ・エコールノルマル音楽院作曲科卒業、1995年パリ国立高等音楽院作曲科を第1位指名で一等賞を得、首席で卒業。作曲をポール・メファン、平義久、兼田敏、保科洋、松井昭彦氏に師事。1993年、名古屋文化振興賞作曲賞入選(第1位)、同年日本音楽コンクール第2位入賞、2005年芥川作曲賞を受賞。また、2005年はIRCAM(フランス国立音響/音楽の探究と調整研究所) 講習生として選抜され電子音楽と作曲の分野で研鑽を積む。帰国した1996年から2001年まで同志社女子大学専任講師、その後、桐朋学園大学、愛知県立芸術大学大学院講師を経て、現在は、東京藝術大学、国立音楽大学及び大学院で後進の指導にあたっている。2009年芥川作曲賞選考委員、2011～2013年日本音楽コンクール作曲部門審査員を

務める。日本作曲家協議会、日本現代音楽協会、日本音楽著作権協会それぞれの会員、アンサンブル・コンテンポラリーαのメンバー。これまでに、Music Tomorrow、Music from Japan、サントリー音楽財団、名古屋フィル、読売日響、しらかわ・紀尾井・いずみ3ホール共同プロジェクト、横浜文化振興財団、愛知県文化振興事業団、東京シンフォニエッタ、22世紀クラブ、武生国際音楽祭などの団体が企画する演奏会や、多くの演奏家から委嘱を受け新作を発表。作品はNHK交響楽団など国内外の主要なオーケストラや現代音楽アンサンブル、優れた演奏家たちによって演奏され、またカーン、ザールブリュッケン、ダルムシュタット、武生、ニューヨーク、ジョグジャカルタ、テグ、ガウデアムスなどの音楽祭や、アジア、欧米での演奏会、テレビ、ラジオなどでも紹介されている。

Gi-Co-Ma

岐阜現代美術館  
Gifu Collection of Modern Arts

**岐阜現代美術館**

ギャラリーでは、現代音楽作曲家斉木由美氏がインスパイアされた桃紅作品を展示しています。桃紅作品と現代音楽の出会いから生まれる深い共鳴をお楽しみください。

岐阜県関市桃紅大地1番地(鍋屋バイテック会社関工園内) phone:0575-23-1210 http://www.gi-co-ma.or.jp/

## Program (文: 斉木由美)

### オリヴィエ・メシアン *Olivier Messiaen* (1908-1992)

#### 鳥の小スケッチ *PETITES ESQUISSES D'OISEAUX* (1985)

- I. ヨーロッパコマドリ *Le Rouge-gorge*
- II. クロツグミ *Le Merle noir*
- III. ヨーロッパコマドリ *Le Rouge-gorge*
- IV. ウタツグミ *La Gruie musicienne*
- V. ヨーロッパコマドリ *Le Rouge-gorge*
- VI. ヒバリ *L'Alouette des champs*

「鳥類はわれわれの遊星上に存在するおそらく最大の音楽家」と述べたオリヴィエ・メシアンは、鳥の<さえずり>を様々な国や地域に出かけて採譜し、それをもとに、「鳥たちの目覚め」(1953)、「異国の鳥たち」(1956)、「鳥のカatalog」(1956-59)、「クロノクロミー」(1959-60)など、多くの作品を書いた。「鳥の小スケッチ」は独奏ピアノのための小品6曲からなる。「ヨーロッパコマドリ」における転がりつつ下降するアルペジオと、それに続くゆったりした動きや洗練された旋律、「クロツグミ」の幾分勝ち誇ったような晴れやかな節回し、「ウタツグミ」の呪文のような反復、「ヒバリ」の高音域での饒舌なさえずり…。それぞれの鳥に固有の旋律やリズムの動きが面白い。(pf)

### 斉木由美 *Yumi Saiki* (1964-)

#### アントモフォニーⅦ *Entomophonie VII* (2014/世界初演)

タイトルの「アントモフォニー」とは、ギリシャ語で昆虫を表わす「エントモス」と、音を表わす「フォネー」をつないでフランス語読みした私の造語で、2001年頃から書き始めた連作である。笙独奏のための第7作は、コオロギやキリギリスなど、秋の虫がすく音風景のスケッチをもとに作曲した。元来、静かで神聖な雰囲気を持ち、持続する響きが魅力の笙であるが、この曲ではあえて、単音や重音でのリズム的な反復や、突然の休止など、虫の鳴く音の特徴を取り入れ、笙という楽器の新しい可能性を試みている。(sho)

#### トリコラージュ *TRI-COLLAGE* (2014)

無伴奏チェロのための作品。タイトルが示すように、3つの音楽の断片を貼り合わせて作曲した。1つ目は、嘆きの歌。独特な旋律は、「ヨブ記30章20-31節」のテキストから、その韻律と文節と抑揚を読み取り、それを音に置き換えて作られている。不幸に襲われた人間の内奥にある深い哀しみを、無伴奏チェロが限りなく人声に近い音色で、語るように奏でる。2つ目は、不変の象徴としての「海」をイメージして書かれている。波音を彷彿とさせるようなダイナミクスや、持続する単音が、協和的に、あるいは不協和的に揺れ動き、豊かな音色で大らかに描かれる。3つ目は、「虫の響き」で、細かく振動する音や、音の切り際や、立ち上がりにわずかにカーブする高音の反復等によって描写される。3つの場面は、曲の進行につれて次第に早く転換していく。(vc)

#### エピソードI *Episode I* (2009)

「エピソードI」は、1991年から5年間フランスに滞在したときの記憶が背景にある。当時、新しい潮流であったスペクトル音楽(音響現象を解析し、理論的に倍音を合成して作曲する)が音の内部を観察することから始まったように、私は、音響をひとつの生命体と見立て、響きの内部で起こっている様々な音波の運動をイメージし、そこから導きだされた4種の音の断片をもとに全体を構成した。曲の後半にはスペクトル音楽を彷彿とさせる響きが提示される。(vn+pf)

(休憩20分)

#### 嘆きは踊りに変わる *Turn My Mourning into Dancing* (2013)

舞曲がテーマの演奏会で昨年に初演。この作品は、「羊飼いが夜通し羊の番をしながら野宿していたところに、天使が近づき救い主の誕生を告げる」、あの有名なクリスマスの物語(ルカ福音書2章)のイメージがもとになっている。天使や羊飼いの、天上から地上/畏れから喜び/闇と光/苦難から希望、といったダイナミックな変動は、私に踊りを想起させた。曲は、「讃えられよ、イエス・キリスト」というクリスマスコーラルが様々な装飾・変形されながら全体に散りばめられる。時折登場する軽やかなダンスは曲の最後の“喜びの天使の主題”に接続される。(fl+cl+vc)

#### 歓 *JOY* (2014/岐阜現代美術財団委嘱新作・世界初演)

「歓」は、昨年(2013年)、100歳を迎えられた篠田桃紅氏への祝意とともに、氏の同名タイトルによる屏風作品<歓>に着想を得て書いた作品である。協和的な響きや上行する音型、単純なリズムや打楽器の書法など、篠田桃紅氏の作品が放つ力強い印象に導かれた音素材によって、輝く赤に象徴される人間の根源的な歓びを表現した。(pf)



歓/JOY 2001年 170×172cm 朱・銀泥・銀地・和紙

鮮烈なく朱>。目映ゆいばかりの、印象的な朱の内に、騒りや憂いを見いだすことはできない。朱は、神々しい銀箔の上に突き抜けたような明るさと温かみを孕み、輝きを放っている。右肩上がりの大らかな面は、歓びの高揚感を醸し出しているかのようだ。

太い線の並列は「時」を形創り、その「時」を縦横に重ね合わせることで、奥行きある「表情」が生み出される。その「表情」の身振りは、ためらうことなく、中断することなく、分割されることなく、シンプルに、大胆に、画面いっぱい描かれる。

直感と潔さ、強いエネルギーが好きだ。<朱>は、人が人であるが故の、潜在的な、あるいは原始的な「歓」の表情を物語っている。

(斉木由美 2014年5月)

#### キリエ-b *KYRIE-b* (2008/2013/世界初演)

天の声・永遠の象徴としての笙と、時の声・地の声としてのフルートとの、対峙と融合の試み。笙がグレゴリオ聖歌の「あわれみの賛歌・第9番(第1旋法)」の旋律の断片を曲全体にわたって奏し、フルートはさらに細分化された旋律を装飾しながら動く。(sho+b.fl)

註:この作品は、当初(2008年)、武生国際音楽祭の委嘱により書いたもので(「キリエ」)、編成は笙とグレート・バス・リコーダーであった。今回、リコーダーをバス・フルートに置き換え、「キリエ-b」とした。

#### アントモフォニーⅡ *Entomophonie II* (2003)

「虫の響き」シリーズ第2作。この曲では、フルートでスズムシを、弦楽器はそれ以外の虫たちを、バス・クラリネットは翅が震える音など虫の音響上の特徴を、ピアノは風や光、樹々の音など、音素材を限定的に用いながら、浮遊する虫の音を発展させることなく時空に漂わせ、劇的性格やダイナミズムなどは極力排除しながらも、緊張を持続させた音楽の成立を目指している。秋の虫の響きによる、ひんやりとした空気、止まっているような時間は永遠への憧れとつながっている。(fl+b.cl+vn+vc+pf)